

(第三種郵便物承認)

区(重伝建)の扉入口として、観光客を呼び込もうと店内を大幅に改装。矢野秀一社長は「重伝建を中心となつて盛り上げたい」と意気込んでいる。

これまでに茶や米、酒や菓子などの販売が中心だったが、今回の改装で小売部門を減らし、同社の茶を気軽に楽しめるよう喫茶スペースを拡大した。客席を

観光客が休憩できるようにした。隣接する桐生歴史文化資料館を店内に移し、同市の織物伝説にまつわる生き人形「白瀧姫像」も展示している。かつて同社で使用していたレトロな看板や昔の

広い範囲で晴れるが、湿った空気の影響で朝晩は曇りとなる見込み。日中の予想最高気温は前橋27度、みなかみ26度。
(文 高橋和真、写真 三神和晃)



て1700カ所余りを目標やドローンなどで調べる。点検開始に合わせ、箕郷町上芝の榛名白川での作業を富岡賢治市長が視察した。総点検は2014年度から毎年実施。本年度は内水汜濫防止のため、側溝内に

上毛電鉄の100年1冊に

友の会が記念誌

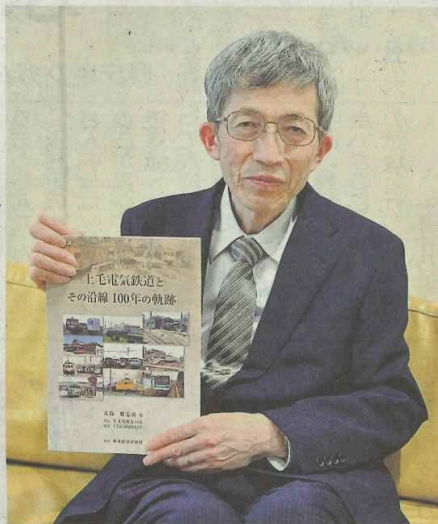
前橋市と桐生市をつなぐ上毛電気鉄道が27日に設立100周年を迎えることに合わせ、上毛電鉄友の会は記念誌「上毛電気鉄道とその沿線 100年の軌跡」を作成した。赤城山南麓の地域交通を担ってきた上毛電鉄の歩みをまとめた。自然災害や社会状況の変化を経て経営を続けてきたことを踏まえ、大島登志彦代表(71)「前橋市若宮町」は「苦難を乗り越え、地域を支えてきた意義は大きい」と話している。

「地域支え意義」

交通地理が専門で高崎経済大名誉教授の大島代表がまとめた。同会は2010年に発足。当初は長期目標として90年史の作成を目指していたが、文献が少ない中で作業が進まず、途中で100年史に切り替えて計画を進めた。

上毛電鉄は1926(大正15)年に設立。当初は利根川を挟んで群馬、埼玉県

をまたぐ上武地域の広範囲にわたる計画で、前橋を起点に桐生に至る路線と、途中の大胡から伊勢崎を経由して本庄まで至る路線が想定されていた。記念誌では28(昭和3)年に中央前橋駅―西桐生駅間(25・4キロ)が開通したものの昭和初期の世界的な大恐慌の影響で、埼玉までの路線は実現しなかった。



記念誌を手にする大島代表

とについて触れている。年間輸送人員の推移もまとめ、高度経済成長を背景に65年度はピークの958万人となったが、社会の影響で徐々に減少し、現在は140万人を下回っていることも示した。戦後間もない復興期の関東一帯を襲った47年9月のカスリーン台風についても

掲載した。「多数の橋梁が流出するなど、被害は甚大ではあったが、全社あげての努力で、11月2日までのわずか2カ月足らずの間で全線復旧した」と記述し、迅速な復旧作業だったことを紹介している。A4判フルカラー、146頁。これまでの歩みのほかに、資料編では列車やダ

前橋

イヤの変遷、沿線の高校・大学、赤城山の観光パンフレット、バス路線に関わる資料などを盛り込んだ。年表では上毛電鉄のみならず、全国・群馬の鉄道の流れ、上電バスの動きなど細

かな情報も入れて充実させた。大島代表は「鉄道好きな人はもちろん、市民の身近な交通でもあったので、通勤や通学で利用した方々に思い出として親しんでい

ただける。多くの方に読んでもらいたい」と話している。3850円。県内主要書店や通販サイト「アマゾン」で購入できる。
(斉藤弘伸)

ギャンブル依存 実情語る 長野原でフォーラム



講演する針木施設長

国の「ギャンブル等依存症問題啓発週間(14〜20日)」に合わせ、ギャンブル依存症の人の社会復帰を後押しする入寮型リハビリ施設「AREA(エリア)

軽井沢(長野原町)は14日、町内の総合運動場「若人の館」でフォーラムを開いた。入寮者がギャンブルに熱中して抜けられなくなった実体験を発表。地域住

民や入寮者の家族ら60人が見守った。入寮者の30代男性は仕事や人間関係がうまくいかなかった際、当たりの時に好きなミュージシャンの曲が流れるパチンコの機種に熱中した。「自分が誰にも必要とされていないと感じていた。借金が膨らんで一度パチンコをやめたが、もう一度繰り返した。家族の支えでやめた」と声を詰まらせながら振り返った。別の30代男性は中学時代から馬券を購入していたと告白。その後、会社の金を横領してギャンブルに使ってしまったという。「ストレスのはけ口がギャンブルになり、逃げるような生き方しかできなかった。エリアに来て、やっと自分と向